## 骨・関節 Ⅱ

303 前立腺癌の骨シンチグラフィの検討 松井律夫,西山章次、金川公夫,浜田俊彦,山崎克 人,河野通雄(神戸大学放射線科), 杉村和朗(島 根医科大学放射線科)

昭和57年以来前立腺癌の60人の患者に骨シンチグラフィを延べ155回施行し、そのうち骨シンチグラフィを複数回施行した29例の内で初回何らかの異常集積を示し、転移を疑われた例で其の経過観察骨シンチグラフィで骨転移と確信できたのは、22例中11例でその他は転移と確信出来ないかあるいは他の原因と考える例であった。前立腺癌は高齢者に多いためSpondylosis deformanse、osteomalasia、osteoporosis、traumatic fracture等を伴いやすく骨シンチグラフィのみでは骨転移と診断するのは困難であった。長期経過観察した症例の中で2例当初ほぼmultiple bone metaと考えていたものが骨シンチグラフィで著明改善を認めた。1例はcastorationにて骨シンチグラフィが完全に正常になりPAPも正常化し、腫瘍性低リン血症性骨軟化症が疑われた

304 前立腺癌患者の骨シンチグラフィ 塚本江利子、伊藤 和夫、中駄 邦博、藤森 研 司、川村 直之、古舘 正従(北大核医学講座)

## 305 肺癌骨転移のシンチグラムによる経過観察

吉岡清郎¹,松沢大樹¹,佐藤多智雄¹,尾形優子² (東 北大学抗酸菌病研究所放射線¹,仙台厚生病院²)

われわれは、年間約250例の組織診のついた肺癌症例の骨シンチグラムを行っている。この中で治療経過の観察、疼痛の出現などで骨シンチグラムの経過観察の依頼を経験する。前回本学会で、肺癌骨転移巣過観察観型による相違を報告したが、シンチグラム経過観察においても組織型による相違が認められた。扁平上皮癌、腺癌、小細胞癌、大細胞癌の主要4組織型における骨転移巣経時変化の相違を中心に検討を行った。

疼痛の訴えの発現と骨転移出現の関係等の検討を加 え発表する。 306 肺癌の骨転移に関する核医学的検討 吉居俊朗,石橋正敏,森田誠一郎,梅崎典良,毛利 康茂,檀浦龍二郎,高橋一之,大竹 久(久大 放)

肺癌症例の骨シンチグラムを検討し,肺癌における 骨転移について検討した。

骨シンチはTc-99m-MDP 20 mCi 静注、 $3 \sim 4$  時間後に全身像およびスポット像を得た。骨シンチの所見について、組織型、病期分類、発生部位および個数などについて検討した。

肺癌患者 202 例中, 骨転移を認めたもの 49 例, 骨転移の発生率は腺癌 35.6 %, 扁平上皮癌 10.9 %, 小細胞癌 27.7 %, 大細胞癌 26.6 %であった。 転移部 位では肋骨, 椎骨に多く, 多発性が多かった。